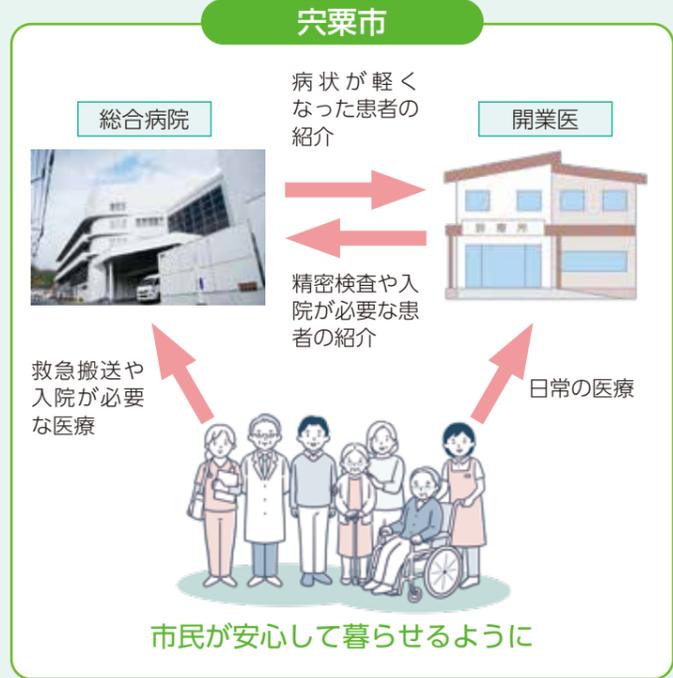


これからの病院ネットワークイメージ



市は令和元年9月、2300人の市民を対象に新病院に関するアンケートを実施。1252人から回答がありました。翌年10月、アンケート結果を参考に新病院の方向性を示す「基本構想」がまとめられ、令和3年12月にはより具体をまとめた「基本計画」が策定されました。



基本計画で病床数や診療科目などが決まった新病院。今年度はいよいよ設計段階に入ります。これからどんな病院像が描かれていくのか、今月はその役割と診療機能を紹介します。

描かれる役割と診療機能

地域包括ケアシステムを支える病院として

新病院では、地域に開かれた病院として外来診療を行うことはもちろん、市内の開業医と連携を図りながら、手術や入院が必要な重症患者を受け入れる「二次救急医療」が守られます。子どもを安心して産み、育てられるよう「小児・周産期医療」が継続され、また通院が難しくなった患者の「在宅医療」にも取り組むことで、地域包括ケアシステムを支える地域医療の拠点としての役割を果たすとともに市民が安心して暮らすための医療が提供されます。さらに感染症拡大への対応や災害発生時にも病院内の機能が維持できる対策がとられます。

オンライン診療も視野に

診療科は現在の内科や外科、産婦人科など12診療科と呼吸器外来や糖尿病外来などの専門外来を基本とし、高齢化の進行に伴い必要

性が増す「整形外科」の常勤化の検討が進められます。専門外来では不足する診療分野でのニーズに対応できるよう、必要な医師の確保などに努めていくとされます。

3年前の市民アンケートで出された、「循環器内科」や「脳神経外科」の設置を求める意見に対して、市は基本計画の段階で「高度な専門医療を担っていくには、専門性の高い医師の確保と高額な医療機器、施設整備などが必要のため、これらの疾患への対応は、機能が充実した中播磨地域の高度急性期医療機関との連携により対応する」としています。さらに「新病院ではオンライン診療などICTを活用し、大学病院や中播磨地域の基幹病院との連携に力を入れた遠隔診療にも取り組むことで、心疾患や脳疾患などの高度先進医療への初期診療が担えるよう検討する」とし、今後必要な整備が進められます。

今回のテーマは「新病院の病床機能」です。

※高齢者が住み慣れた地域で生きがいを持ち、安心して暮らせるよう住まい・医療・介護・予防・生活支援を一体的に提供する仕組み